

【月刊】キリスト教書評誌

# 本のひろば

November  
2022

11

ISSN 0286-7001

一般財団法人キリスト教文書センター

1957年7月17日第三種郵便物認可

2022年11月1日発行(毎月一回1日発行)第779号

● 出会い・本・人

教会なき人のための聖書——塚本虎二と標準読者 赤江達也

● 特集 ウクライナの歴史と宗教を学ぶための

この三冊！ 高橋沙奈美

● 本・批評と紹介

大庭貫宣著

エイレナイオスの聖霊神学 大貫 隆

J・D・クロッサン著／小磯英津子訳／河野克也解説

最も偉大な祈り 石田 学

柴崎 聰著

詩人は聖書をどのように表現したか 時澤 博

堀 忠著 レプラと奇跡 大嶋得雄

クニイ・ベルガー著／三野孝一訳

開かれている門 石原知弘

村岡崇光著 精選 死海文書 山我哲雄

小塩海平著 B・C級戦犯にされたキリスト者 豊川 慎

近刊情報

書店案内

キリスト教の歴史観は  
傲慢の罪をどのように  
暴き、希望を示すのか



**悲劇を越えて**  
「聖書的信仰による知とその預言者的な洞察力!」  
ニーバーの成熟した神学思想の端緒となった著作の待望訳の翻訳。  
R・ニーバー著 高橋義文／柳田洋夫 訳  
近藤勝彦氏(東京神学大学理事長)

● 四六判・並製・296頁・定価3,190円

J・ゴールディングей (John E. Goldings)  
1942年英国ハミントンに生まれる。オックスフォード大学卒業、  
哲学博士(フッティンガム大学)。1967年英国聖公会司祭に叙階。  
現在フラー神学校名誉教授(旧約聖書学)。  
著書 *The Old Testament for Everyone*, Louisville: Westminster John  
Knox Press, 2011、ほか多数。著書の邦訳は、今回が初めて。



旧約新約聖書66巻に紡がれた、神の物語の中へ――

J・ゴールディングей 著  
本多峰子 訳

聖書が書かれた歴史的・地理的背景  
を知り、各書の文学ジャンルごとの  
特色を味わう。世界に向けて語られ  
た神の言葉の受け取り方を、今日の  
私たちに教える入門書。

● 四六判・並製・220頁・定価2,640円

# 神の物語としての聖書

大学にキリスト教は必要か  
新しい時代を拓くもの  
梅津順一 著



世俗化によって宗教と人間教育が分  
離され、学問も精神的基盤を失いつ  
つある現在、日本のキリスト教主義  
学校にはどのような可能性が残され  
ているのか。青山学院院長、キリスト  
教学校教育同盟理事長を務めた著者  
が語る、価値ある考察と試論。

● 四六判・並製・210頁・定価1,870円

# 世代から世代へ

教会における信仰形成教育の適応課題

チャールズ・フォスター 著 伊藤 悟 訳



信仰的伝統を継承していくために、  
私たちは、いま何を始めるべきなの  
か? 教会教育の碩学が提言する適  
応課題(アダプティブ・チャレンジ)  
と取り組み!

● 四六判・並製・300頁・定価3,740円





# 教会なき人のための聖書——塚本虎二と標準読者

赤江達也

岩波文庫の一冊に『新約聖書 福音書』（岩波書店、一九六三年）がある。翻訳者は塚本虎二。内村鑑三にはじまる無教会の伝道者、聖書学者である。口語訳の先駆者である塚本は、自分の翻訳を「教会なき人のための聖書」と呼んだ。そこには「標準読者」についての思想がある。

塚本のいう「教会なき人」は、無教会キリスト者というだけではなく、なんらかの理由で教会に通うことができない人を指している。具体的には、「療養所のベッドに一人これを読む人を標準読者と考え」ている（塚本虎二「口語訳のなるまで」『聖書知識』第二八五号、一九五四年一月、九頁）。

じつさい、口語訳の第一分冊がラジオ放送で取り上げられると、療養所の人たちから「イの一番に」三通の電報が届けられる。そのことを喜びながら、塚本はこう書いている。

の読める人たちには、私のこの訳はあまりに稚拙ともみえ、粗末に感じられるであろう。また敷衍や説明は邪魔とも思われよう。しかし教会も牧師もなく、ただ一人でナザレの大王の子イエス・キリストの福音によつて救われようとする、たった一人の人の友となり得るならば、私の念願は達する。（塚本虎二「三報の電通」『聖書知識』第二八五号、一九五四年一月）

塚本は口語訳にこだわり、ポイントを下げた注釈を本文に織り込む「敷衍訳」という工夫をつづけた。そのこだわりと工夫は「療養所のベッド」で一人聖書を読む標準読者の想定から生じている。塚本訳聖書には、本と人が出会う場面についての独自の思想がふくまれているのである。

（あかえ・たつや 関西学院大学社会学部教授）

教会をもつ人、自由に原文が読め、或は外国語の翻訳や注解

## ウクライナの歴史と宗教を学ぶための ▼この三冊！

高橋沙奈美

(たかはし・さなみ・九州大学講師)

難しい。以下では、ウクライナの宗教に触れながら、この国の歴史を学ぶことのできる三冊を紹介したい。

ウクライナの歴史を通史的に学びたいのであれば、黒川祐次『物語 ウクライナの歴史——ヨーロッパ最後の大国』から読み始めるのがよいだろう。古代から順を追って、黒海を通じたギリシア・地中海地域との交易から説き起こされる。キエフ・ルーシが東方正教を受け入れた過程については、『原初年代記』の記述が紹介されている。時の大公ヴォロディミルが、酒が飲めないのはつまらんと行ってイスラームを退け、典礼の荘厳さにひかれて東方正教を受け入れた、という逸話は、史実としての信憑性こそ疑われるものの、ルーシ人の氣質をよく表したものであるとして今も人口に膾炙している。キエフ・ルーシが商業を中心として発展した国家であり、キーウが一三世紀ヨ

ロシアによるウクライナ侵攻のイデオロギー的背景として、両国が東方正教（これに関しては本誌六月号の特集参照）の信仰を共有することが指摘されている。日本ではよく知られていないことも相まって、東方正教に注目が集まりがちであるが、実は両国ともに複雑な多民族・多宗教国家である。「キエフ・ルーシ」と呼ばれる九世紀のウクライナに存在した国家が、東方正教を受け入れる舞台となったのは、地中海に通じる黒海に面していて、ギ

リシアの文物や移民を受け入れていたからである。中世から近世にかけて、ウクライナは東方正教とカトリック教会が覇を競う舞台であったし、クリミアはオスマン帝国の保護領となつてイスラームが普及した。さらに、西欧諸国における迫害を逃れたアシケナージ系ユダヤ人が数多く移住し、独自の文化を發展させた。決してウクライナに限ったことではないが、その地域の歴史と文化の成り立ちを知ることなしに、現在の宗教状況を理解することは

ロッパ最大級の都市であったということも、わが国ではほとんど知られていないが、ウクライナ人が現在も誇る重要な事実である。

クである。

キエフ・ルーシの衰退後、ウクライナの地を統治したのは、「農民の地獄、町民の煉獄、貴族の天国、ユダヤ人の楽園」ということわざが残るポーランド・リトアニア共和国である。また、当時奴隷貿易でにぎわっていたクリミア汗国への目配りも重要だ。この時、オスマン帝国に売られたウクライナ人奴隷女の一人に「ロクソラーナ」（オスマン側での名は「ヒュレム」）がいる。彼女はスレイマン一世の寵姫となり、ハレムに君臨した。奴隷から最高位の女性へという波乱万丈の人生は、現在に至るまで人々の想像力を掻き立て続けている。さらに、このクリミア汗国に対抗して現われたのが、「正教の擁護者」を自認した武装集団コサツ

コサツクの首領「ヘトマン」の下で、キーウは復興を遂げた。こうしてウクライナを独立に導いたのがボフダン・フメリニツキーである。ヘトマン国家を打ち立てたフメリニツキーは、ポーランドからの独立を守るために、一六五四年、同じ正教国家であったモスクワとの同盟を結んだ（ペレヤスラフ協定）。しかし、彼の死後にモスクワとポーランドが締結したアンドルソヴォ条約に従って、ドニプロ川左岸（東部）ウクライナはモスクワの支配下に置かれ、ロシア支配の時代が幕開けるのである。この時代に活躍したのが、ウクライナ第二の英雄と呼ばれるイヴァン・マゼッパである。彼はビョートル一世の寵臣として権勢を振るつたが、のちにコサツクに多大な犠牲を強いるビョートルを裏切ってロシアと戦い敗北した。ちなみに、現在のウクラ

イナ各地に残る壮麗な教会建築の多くは、「マゼッパ様式（ウクライナ・パロック）」と呼ばれ、この時代に建設されたものである。彼らコサツクの生き様もまたヨーロッパの文豪、音楽家、画家たちにインスピレーションを与えた。ウクライナ史を学ぶと、ヨーロッパ芸術に対する造詣が深まる。本書はウクライナの歴史を彩るロマン主義によく焦点を当てており、一九世紀以降のウクライナで顕著になるナシヨナリズムが依拠した「物語」にあふれている。

ヘトマン国家が衰退した後、ロシア帝国によるウクライナ支配が本格化する。右岸ウクライナの大部分も、一八世紀末のポーランド分割により、ロシア帝国の支配下に移った。コサツクの指導者や、ポーランド貴族化したウクライナ人が貴族の身分を認められ、サントク・ペテルブルクで活躍したり、

ロシアの芸術界に著しい貢献を行った。こうした知識階級の中から、ウクライナの歴史、文化、言語の独自性を訴える「ウクライナ・ナショナリズム」が生じてくるのである。

ウクライナ・ナショナリズムに関する必読の書は、二〇二二年四月に復刊された中井和夫『ウクライナ・ナショナリズム——独立のデレンマ』である。一九世紀以降のウクライナ史は、ナショナリズムを縦糸として、ロシアとの関係を横糸に織り上げられてきたと言つて過言ではない。本書は、ウクライナ・ナショナリズム運動の展開について、ロシアをはじめとする周辺国家の影響という背景を紐解きながら、政治と文化の両面から丁寧を追つていく。

本書では、歴史的発展に従つてウクライナを六つの地域区分（①ドンバス、ハリコフを含むスロピツカ・ウクライ

ナ、②キエフを中心とする旧ヘトマン国家領域、③右岸ウクライナ、④オデッサを中心としてエカテリーナ二世期以降に発展したノヴォロシア、⑤旧オーストリア領であったガリツィア、⑥旧ハンガリーであったカルパチア・ルーシ）に分けることを提案する。

長年にわたつて甚大な影響力をふるつてきた隣国ロシアとの関係について、著者は両民族の最初の意識的な出会いとしての一六五四年のペレヤスラフ条約以来、「本当の意味での「対話」が欠如している」と指摘する。ソ連解体後、クリミアの帰属問題に端を発する両国の対立が生じたが、これについても本書は詳細な検討を行っており、現在に通じる鋭い指摘がなされている。

また、ウクライナの言語や宗教が、ロシア支配下において禁じられ、抑圧されてきた歴史が詳細に書かれるが、著者はウクライナを武力によって支配

され、従属を強いられた被害者としてのみ描くことはしない。ウクライナ自体もまた、複雑な利害関係を持つ少数民族を多数抱え、困難な国民統合を強いられてきた。その中でロシア人同化して、自らも支配体制の内側に入り込むことを選んだウクライナ人は少ない。

ただし、正教会の問題については、本書が書かれた時代から、重要な変化があった。本書では、独立後のウクライナにおいて、「ロシア正教会（正確な名称は「ウクライナ正教会（モスクワ総主教座）」が残り、これはもっぱらロシア人かロシア化されたウクライナ信徒から成る、とある。しかしこの教会は、独立した自治権をもち、「ウクライナ正教会」として発展してきたことを指摘しておきたい。それでも、ウクライナの国民統合への苦難の道を丁寧に描く本書の価値は疑いを得

ない。

最後に、ウクライナ独自のキリスト教会であるギリシア・カトリックを扱ったものとして紹介しておきたいのが福嶋千穂『プレスト教会合同』である。一六世紀末のポーランドで行われ

た正教会とローマ・カトリックの合同から始まり、合同の賛否をめぐるキエフ府主教座の分裂、その後のロシア帝国支配下における正教会への「再合同」とハプスブルク帝国支配下での合同教会の発展、ソ連支配下での弾圧を

経て、復活に至るまでの歴史が紹介されている。東でも西でもなく、同時にそのどちらでもあるという複雑な教会のアイデンティティが、まさにウクライナのそれを体現するものであることがわかるだろう。



### 『物語 ウクライナの歴史』 ——ヨーロッパ最後の大国』

黒川祐次：著  
中公新書  
2002年刊  
新書判 190頁  
946円



### 『ウクライナ・ナショナリズム』 ——独立のデレンマ』

中井和夫：著  
東京大学出版会  
1998年刊  
A5判 288頁  
7,920円

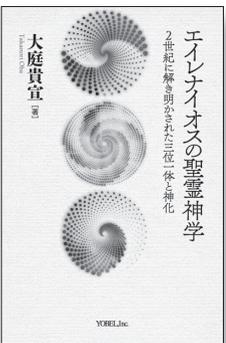


### 『プレスト教会合同』

福嶋千穂：著  
群像社  
2015年刊  
四六判 129頁  
1,650円

神学的貢献の可能性とその限界を  
鮮明にし、今後にも期待する一書

〈評者〉 大貫 隆



エイレナイオスの聖霊神学  
2世紀に解き明かされた  
三位一体と神化  
大庭貴宣著



本書は二〇一七年春に南山大学大学院人間文化研究科に提出された学位申請論文に基づき、その後新たに序論、最終第五章、結論を書き下ろして増補したものである。後二世紀のリヨンの司教エイレナイオスが『使徒的宣教の証明』と『異端反駁』で構築した救済史の神学を聖霊論の観点から詳細に記述しようという意欲的な試みである。

第一章「エイレナイオスにおける〈神の両手〉の置き換えの思想——〈御言葉と知恵〉から〈御子と聖霊〉へ」では、先達の教父から〈神の両手〉としての〈御言葉 (logos) と知恵 (sophia)〉の観念を受け取ったエイレナイオスがそれを〈御子と聖霊〉へ置き換えたのだとされる。その意図は〈肉の救い (を) 軽視〉し、〈御父以外の別の神の存在を主張〉するグノーシス主義を反駁して、人間が〈神との類似性〉へ完成されるべきこと、そして〈御父の

優位性〉を示すことであつたとされる。

第二章「エイレナイオスにおける善き神と人間の成長」は、第一節でエイレナイオスの神観を取り上げる。それは人間の自立性を尊重する神であり、〈神の両手〉である御子と聖霊はその見守り役である。第二節は、エイレナイオスの救済史の構想の中核を論述する。すなわち、神は人間を原初から〈神の子ら〉として創造したが、人間は墮罪によって〈不滅性〉を喪失してしまった。しかし神は時の満ちるに及んで御子を受肉させ（遣り直し）、再び〈神との類似性〉の回復へと道を開く。御国において〈肉体〉、〈魂〉、〈聖霊〉からなる〈完全な人間〉への〈神化〉が最終的に実現する。第三節は、エイレナイオスの洗礼論に当たるもので、〈不滅性〉と〈不死性〉の回復のために〈洗礼〉の重要性が指摘される。

第三章「エイレナイオスにおける聖霊の人間への臨在」では、エイレナイオスの救済史を〈人間の創造〉、〈旧約時代〉、〈御子の受肉の時代〉、〈教会の時代〉の四つに分け、この順で聖霊の臨在と働きが分析される。

第四章は「聖霊の内在による信者の刷新」と題されて、〈教会の時代〉に洗礼をとおして聖霊が人間に内在すること、その主要な働きは〈助言〉であること、エイレナイオスはそのため繰り返して好んでイザヤ一二・三を適用することが明らかにされる。それはエイレナイオスが聖霊は教会に、すなわち洗礼を受けた信者のみに内在すると考えている証拠だと言う。

第五章「人間を完成へと至らせる聖霊の働き」は、伝統的な言い方に直せば、エイレナイオスの人間論（三つの構成部分…肉、魂、聖霊）とキリスト教倫理（罪、聖霊による刷新、善とは何か、使徒への従順、使徒継承、創造の完成としての神化）を扱っている。続く最後の結論は、本書全体の論旨を章ごとに再度要約している。

私が見るところ、エイレナイオスの救済史の神学はそれ自体が物語性に富んでいる。そのため、それを論述する『異端反駁』第三―五巻は、グノーシス主義諸派の神話への反駁を繰り広げる第一―二巻とは独立に読むことができる。

事実、これまでのエイレナイオス研究の多くが『異端反駁』第三―五巻の物語の分析と記述の形で行われてきた。大庭氏の本書もその線に沿うもので、欧米の研究のみならず、園部不二夫、大貫隆、ハンス・ユルゲン・マルクス（元南山大学長、現藤女子大学長）、鳥巢義文、ペトロ・ネメシエギ、塩谷惇子他による日本語での主な先行研究も丁寧かつ綿密に参照している。『異端反駁』第三―五巻の本文も、既刊の邦訳を吟味した上で、常に私訳で掲出している。

すでにこれらの先行研究の焦点の一つとなっていたものが聖霊論である。これは神論、キリスト論、終末論などに比べるとこれまでのエイレナイオス研究では比較的陽が当たらずにきたテーマである。私自身のことを振り返っても、聖霊論への関心は希薄だったことを認めざるをえない。その後の鳥巢義文、P・ネメシエギ、A・ブリッグマン（二〇一二年）、J・ベアー（二〇一八年）において聖霊論に焦点が当て直されてきたのは当然のなりゆきであった。大庭氏の本書はこの趨勢を受けて、エイレナイオスの救済史全体の中で聖霊が果たす最も重要な働きを見事に明らかにする。それは肉および魂と合体することで、人間を〈神化〉、すなわち〈完全なる人間〉へ上昇させることにある。

著者自身の「あとがき」によれば、学位論文提出後の口

頭試問では、指導教授の鳥巢義文氏他から、「グノーシス主義との対決をより明確にし、〈今日〉の解釈学的地平におけるエイレナイオスの神学的貢献の可能性とその限界を鮮明にする」ことを将来の課題として指摘されたとのことである(二八四頁)。事実、その後五年の歳月をかけて仕上げられた本書にも、その課題に取り組んだ跡が認められる(第一章と第五章)。それでも著者は、これは今後に残された課題だと言う。私としてはその課題に向けて、一点に絞ってエールを送りたい。

私見では、エイレナイオスの救済史の神学には、そのストーリーを整理して記述するだけでは見えてこない次元が潜んでいる。それは現代の言葉で言えば、非神話論化によって初めて取り出される実存理解の次元である。かたやエイレナイオスが自分の聖霊論の中核とみなす〈完全な人間〉は、こなたグノーシス神話(物語)にも現れる。それは神話の冒頭で延々と否定詞を連ねて表現される〈至高神〉そのものの正体に他ならない。グノーシス神話は実は神話ではなく、人間論なのである。この観点からすると、多くのグノーシス神話に典型的な〈ソフィアの過失〉の定型場面が興味深い。ソフィアは最下位とは言え、超越的な天満界の存在の一つである。それが過失を犯して流産の子

への欲求がはらむ危険性の認識も込めている。こうして〈知〉に対するグノーシス主義の両義的な理解が明らかになる。〈知〉は悪を生むと同時に救うもの、救うと同時に悪を生むものなのだ。

おそらくエイレナイオスは、グノーシス主義の言う「御父以外の別の神」(至高神)が、実は〈完全な(第一の)人間〉の別名にすぎないこと、グノーシス主義神話の冒頭の否定神学のトポスはそれを神話(物語)で表現するにすぎないことを、少なくとも感知していたのではないか。これが私の推測である。先行の教父テオフィロス(『アウトルュコス』二18)では〈神の両手〉の一つが〈ソフィア〉であったものを、大庭氏が言うように、エイレナイオスが意図して〈聖霊〉に置き換えたというのも、さもありなん

を産む。それが悪の権化、つまり可視的世界の創造神である。しかし、この過失はソフィアだけの責任ではない。至高神(完全な人間)がソフィアにとって知ろうにも知りえない神であること、そもそもその至高神が自分の思考を働かせて、認識主体と認識対象に自己分化を始めたことの責任が問題になる。天満界のもろもろの存在(アイオーン)の生成はいわばその自己分化の進展にほかならず、その極点がソフィアの生成だからである。とすれば、可視的な悪の世界の生成もソフィアの過失にとどまらず、至高神のそもそもの自己認識の行為にまでさかのぼるわけである。至高神は〈完全なる人間〉とも呼ばれるのだから、悪は他でもない人間が自分自身のなかに、自分が〈知〉の主体と客体に分かれたことに、淵源するのである。

実存論的に見れば、分化を始めた人間の自己が、その分化のゆえに生み出される悪との欠乏の世界に落下し、そこで本来の自己と非本来的な自己の間の分裂にまで昂進する。やがてその本来の自己について、〈我(人間)即神也〉が成り立つことを〈認識〉して、元の自己に回帰するという円環運動が成り立っている。この回帰を可能にする〈認識〉が〈グノーシス〉(gnosis)と呼ばれる。しかし、グノーシス主義は、前述のように、そのソフィアの過失に知

と思われる。グノーシス主義は単純な主知主義ではない。否定形しか表現できない至高神が実は〈人間〉に他ならないという発想は、超越なき現代の人神の思想(人間即神也)そのものであり、その現代的アクチュアリティはあまりに明瞭である。エイレナイオスがこのアクチュアリティを保っているのも、一見〈低級な下手物〉としか見えないグノーシス神話をどこまでも朴訥に書き留めたがゆえである。是非その朴訥を引き継いで、グノーシス神話への単純なレッテル貼りを打破していただきたい。本書の著者の今後に期待するところ大である。

(おおぬき・たかし) 東京大学名誉教授  
A5変型判・二八八頁・定価二五三〇円・ヨベル

**ヨベルの新刊案内**

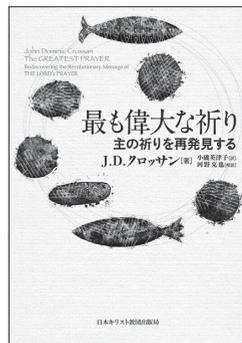
**滝澤武人** 〔桃山学院大学名誉教授〕 四六判・288頁・1980円  
絶筆発売中  
滝澤武人  
好きなねん、イエス!  
この世にひとたび「イエス主義」者たらんと欲すると、教会やキリスト教からどうしてもはみ出してしまふ……そんなアナタとワタシの隠れ信心を激しく肯定してくれるイエス研究者、タキザワブジンの、笑いに満ちかつ大真面目な「イエス」探求の書。

**金子晴勇** キリスト教思想史の諸時代 VI 宗教改革と近代思想 〔第6回記念本〕  
新書判・平均272頁・各巻本体1320円  
I「ヨーロッパ精神の源流」〔既刊〕  
II「アウグスティヌスの思想世界」〔既刊〕  
III「ヨーロッパ中世の思想家たち」〔既刊〕  
IV「エラスムスと教養世界」〔既刊〕  
V「ルターの思索」〔既刊〕  
VI「宗教改革と近代思想」〔新刊〕  
VII「現代思想との対決」〔第7回記念本・準備中〕  
別巻1「アウグスティヌスの霊性思想」  
別巻2「アウグスティヌス二位一体論研究」

ヨベル YOBEL Inc. info@yobel.co.jp  
〒113-0033 東京都文京区本郷4-1-1-5F  
TEL.03(3818)4851 FAX.03(3818)4858  
出版の手引き / 呈 (税込)

# 革命的な宣言としての主の祈り

〔評者〕 石田 学



最も偉大な祈り  
主の祈りを再発見する  
J・D・クロッサン 著  
小磯英津子 訳  
河野克也 解説



ドミニク・クロッサン、この刺激的で挑戦的な新約学者が、イエスの「アッバの祈り」に基づいて「主の祈りを再発見」させてくれる著作です。本書はクロッサンの学術的研究を基盤としていますが、専門的な研究書ではなく、研究に裏付けられた、イエスの教えについての解釈であり、かつ現代のわたしたちに対する祈りへの招きです。著者自身が本書を「イエスのアッバの祈りに関する聖書の黙想の書」（二二三頁）と呼んでいるとおりです。わたし自身読みながら何度も黙想させられました。

クロッサンは主の祈りを、宗教の枠を超えて、全世界に対して意味のある祈りであるという確信を込めて、こう定義します。「私にとって、主の祈りは革命的な宣言であり希望の賛歌です」（四頁）。プロローグとエピローグ、そして八つの章で構成されている本書は、章ごとに主の祈りの

項目を一つずつ取り上げていますが、各章はそれぞれの祈りを独立的に扱うのではなく、一つの祈りの項目が次の祈りへと、クロッサン自身の言葉によれば「クレッシェンド」的につながってゆきます。どの章も、古代から現代までの多岐にわたる物語から語り始められます。第一章が空港の電気コンセントの物語から始まり、第二章は紀元二世紀の一人のユダヤ人女性の話から始まるといったように。そしてそれぞれの物語が、隠喩として各章の祈りの主題につながります。

最初の二つの章でクロッサンは、神を父と呼ぶことは神が世界の世帯主であることの表明であり、パウロが「アッバ、父よ」と呼びかけることは、人が神の相続人であり、「世界という世帯ですべてが充足するようにする神の力と責務を引き受けている」（六七頁）ことだと語ります。す

べての章をとおしてクロッサンは、イエスが人々に示した代替的なビジョンは、分配的正義と修復的正義であり、それは旧約の伝統に鳴り響いていた主題であることを明らかにします。その正義は決して暴力的なものではありません、徹底して非暴力によるものです。「我らを試みに遭わせず」という祈りは、正義を、たとえそれが防衛のためであれ、暴力によって実現しようとする誘惑を斥ける祈りであるとの解釈は、まさに今の時代に必要なことです。

エピローグでクロッサンは、聖書の物語る、非暴力的な分配的、修復的正義の神と、報復的、刑罰的正義の神という、相容れない神理解について語ります。コンスタンティヌス時代のコーラ修道院に描かれたバントクラツールがなぜ手にした聖書を読んでいるのかを譬えとして、「非暴

力の受肉者キリストが、黙示思想に見られる暴力的なキリストに挑戦し、裁きを下さのです」（二三七頁）と述べるクロッサンの聖書観に共感させられます。本書はとても挑戦的です。読後には、もはや主の祈りを決まり切った祈りとして唱えることは難しくなることでしょう。

訳者あとがきによれば、最初お母様のために翻訳されたことですが、そのこともあつてか、たいへん読みやすい分かりやすい日本語です。これからもキリスト教著作の翻訳での活躍を期待します。河野克也氏の解説も的確で、クロッサンについて、また本書の特徴についてよく理解できます。最初に解説を読むことをお勧めします。

（いしだ・まなぶ 日本ナザレン教団小山教会牧師）  
（A5判・二五六頁・定価四一八〇円・日本キリスト教団出版局）

## 神の国への郷愁（サウダージ）と復活の希望を語る黙想集

**ヨハネ福音書を読もう下**  
神の国への郷愁（サウダージ） 松本敏之

ヨハネ福音書を読もう下  
神の国への郷愁（サウダージ）  
松本敏之

ブラジルでの経験を踏まえ、現代教会の課題に向き合い、ヨハネ福音書11〜21章に即して信仰と希望と深い慰めを語った43編の黙想を収録。四八判並製・248頁・定価2640円

【上巻 対立を超えて】発売中・定価2640円

## キリスト教史に関するクイズが満載

**キリスト教の歴史 おもしろクイズドリル**  
越川弘英 監修

楽しく学べ！  
キリスト教の歴史  
おもしろクイズ  
ドリル

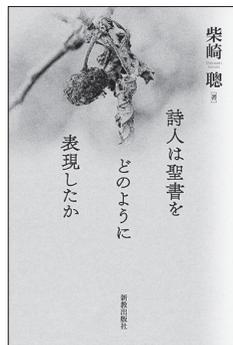
「中世では、虫も破門されたの……」  
など、〇×、4択、穴埋めクイズといっ  
た300問以上のクイズを通して、  
奥深いキリスト教の歴史を知ろう。

A5判並製・96頁・定価1100円

日本キリスト教団出版局  
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18  
☎03-3204-0422 ☎03-3204-0457  
E-mail eigyou@bp.uccj.or.jp 《価格10%税込》  
<https://bp-uccj.jp>

詩人と聖書の関係を  
解き明かす一冊

〈評者〉時澤 博



詩人は聖書を  
どのように表現したか  
柴崎 聰著



本書は、著者が五十年以上に初めて聖書に触れた時から生じた問題意識を元に、聖書と詩人の関わりを考察している秀でた評論である。その経緯を詩人である著者自身が「はじめに」(3-4頁)と「あとがき」(271-278頁)で、明らかに示してくれている。

近代詩を開拓した先駆者としての鳥崎藤村に始まり、牧師詩人として活躍した森田進に至るまで、十六人もの膨大な詩人と詩作品を取り上げ、精緻で透徹な分析を試みている。例えば、僕は橋の袂から下を覗き、川の滯りが語りかける心地良い響きを耳にするようであり、鳥の地図(あるとしたら)を手に大空を飛翔しながら、次々と眼下に広がる世界を、驚きつつ俯瞰している感覚でもある。

装幀はFrank Andreeの写真が、モノトーンの精練されたデザインで配置されており、本書の内実に相応しい装う点である。多くの日本人にとつての美意識に、少なからず影響を与え続けていることを思う時に、改めてこの詩と詩作品に向き合う大切さを教えられた。

他にもプロテスタント教会での評価が分かれる、山村暮鳥の詩「十字架」をめぐる苦悩とキリストとの結び付きについて。又、比較的に歓迎されている八木重吉への深い洞察。「静かさ」と「ほのお」の深層描写。戦後詩の担い手としての、石原吉郎と安西均。石原を「表現する詩人」、安西を「物語る詩人」と定義している視点にユニークさを感じた。四季派の叙情詩人たちの中で、私の詩の導き手でもあった、嶋崎光正を取り上げていることにも注目した。女性詩人の片瀬博子や塔和子、牧師詩人の森田進と…興味は尽きない。

いを纏っている。

それぞれの章もよく整理されており、日常生活において詩とはあまり触れ合うことの少ない読者にも、十分興味を抱いて読める内容となっている。①詩人の生涯②詩作品③まとめという具合に。さらに終章(247-255頁)においては、個々の総括を簡潔に提示してくれており、読者への行き届いた配慮を感じさせる。

詩作品は聖書との関わりの中で創られたゆえ、当然と言えば当然のだが、著者はその聖書テキストの歴史的背景や言語・教義的意味付を把握し、豊富な資料を元に丹念に解説している点にも注目したい。

特に印象深く受け止めたのは、鳥崎藤村の原罪意識の希薄さから現わされた、恋愛・愛欲へのすり替え。聖書の持つ厳格な意味を緩めて、恋愛詩へと変容、傾斜させたとい

本書の結論にあたる部分(256-260頁)においては、余白をめぐる重要な見解が述べられている。聖書の淡々とした叙事的な記述に接すると、行間から生まれる感性と想像の翼は、中空に飛翔し、創作者の内部で何者かが胎動し始める。この余白を贖う者の正体こそ、ルーアハ(ヘブル語)≡ pneuma(ギリシャ語)≡ 風・霊(日本語)であると規定している。

蛇足を承知で言わせてもらえれば、柴崎聰という詩人の原点が、故郷仙台を離れた若き日、横浜の下宿の四畳半で書いた「窗外」という一篇の詩であったことに、私は底知れぬ感動を覚えたのである。

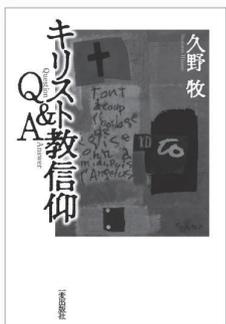
(ときざわ・ひろし)≡日本キリスト教詩人会会員・百万人の福音「旅人の詩」選者

(四六判・二八六頁・定価三三〇円・新教出版社)



キリスト教信仰  
Q & A

久野牧  
HISANO Nozomu



信仰にまつわる疑問の数々…  
「素朴な疑問」に答えます

Q 主イエスを信じる者は、不安や恐れをもって、終わりの時を考える必要はないのですか。

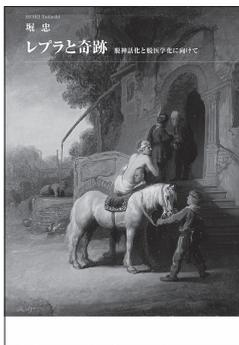
四六判  
定価 1,980 [本体 1,800 + 税] 円  
ISBN978-4-86325-006-2



株式会社 一麦出版社  
札幌市南区北ノ沢3丁目4-10  
TEL (011) 578-5888  
http://www.ichibaku.co.jp  
携帯 mobile.ichibaku.co.jp

## 「このひとつのごまば」を めぐる粘り強い探求

〈評者〉大嶋得雄



レプラと奇跡  
脱神話化と脱医学化に向けて  
堀 忠 著



本書の序論の冒頭には、デュフェリン侯爵夫人（一九世紀のインドにおける「救らい」運動の後援者）の、「このひとつのごまば」ほど、完全な悲惨と孤独を連想させるものは考えられないでしょう」という一文が引用されている。「このひとつのごまば」とは、医学名「レプラ」であり、英語名「レプロシー」、日本語名「らい病」である。現在では、差別・偏見を伴うことから、「ハンセン病」と呼ぶように啓発されている。

昭和初期から、ハンセン病者は法律により、主に国の療養所に隔離されてきた。この隔離に加担した宗教のひとつがキリスト教である。このことは、わが国の「ハンセン病問題」に関する検証会議」の報告書の中にも書かれている。

国立ハンセン病療養所多磨全生園内の単立・秋津教会で奉仕された故荒井英子牧師の著作『ハンセン病とキリスト

ラアト」に置き換えるように訴え続けてきた。だから本書の著者がキリスト教の信徒・医師・学者として、「このひとつのごまば」にこだわり、誤訳を決定的に指し示すことを自らの使命・責任と感じ、学問されてきたことがよく理解できる。レビ記だけでなく、イエスが語られたレプラもツアラアトを指し、医学上の含意を読み取るべきものではないことを明示されている。

「ツアラアト」を世に有らしめ、イエスの働きを通してそれを癒そうとされたことも、神の奇跡であろう。しかし後世、「ツアラアト」がハンセン病と理解されたことによつてながらく傷つけられてきた神の名誉は、回復されなければならぬ。

まず、牧師や神父など聖職者、神学生、神学者、そして聖書科教諭や教会役員の方々に読んでいただきたい。この語にまつわる古代、中世からの言説や用語をめぐる混乱、論争なども記されているが、これらを含む書の題名があらわす『レプラと奇跡——脱神話化と脱医学化』の意味するところを理解していただきたい。

旧・新約聖書にはこの語の誤訳が合計六六か所も出てくる。キリスト信者としては、避けては通れないところである。聖書のらしいの誤訳を示す書としては、ブラウン著『聖

教』（一九九九年）のあとがきの一文を引用させていただく。「初めて会う私にこう語りかけてきた一人の老人がいた。『あなた、キリスト教の牧師やてな。なんで聖書にはあんなに『らい病、らい病』と書いてあるんや。あんなに『らい、らい』と言うから、むしろ差別されるんや。なんとか言うてみい。……聖書に引き続き注解書も非難されたりする前に、反省し、誤りを詫びて、誤訳や注解を正しいものにしておくことを切望する』」。

評者は長島曙教会の牧師として実質三十六年間在籍させていただき、これらの差別・偏見・隔離の原因の根源が、キリスト教の教典である聖書の原語、「ツアラアト」＝「レプラ」の誤訳にあると考えてきた。評者はまた、入園者の病状がレビ記の「らい」と記述されている状態と異なることから、主な出版社にこの誤訳を原語の音読の「ツアラアトの中のらい」（石館守三訳、一九八一年）と犀川一夫著『聖書のらい』（一九九四年）がある。良書であるが、誤訳をめぐる歴史的な経緯についての検討という点には、十分でないうらみがあった。この画期的な著書が世界各国語に翻訳されていくことを願う。

そのうえで著者にはいつか、古代から現在に至る、「ツアラアト」、「レプラ」として差別を受けたひとびとの系譜を明らかにしていただきたい。イエスの時代までは存在したが、共観福音書以外の新約聖書にこの言葉は出てこない。では「ツアラアト」とはいかなるものであったか、本書でもこのことについての検討は避けられている。それはいつの時代まで、どのようなかたちであったのであろうか、そして現在とは？

（おおしま・うるお 国立ハンセン病療養所長島愛生園内単立・長島曙教会名誉牧師）

（A5判・二八〇頁・定価五九四〇円・新教出版社）

### 黙示録を宣教的な 視点で読み解く

〔評者〕 石原知弘



開かれている門  
ヨハネの黙示録のメッセージ  
クニイ・ベルガー著  
三野孝一訳



本書は、南アフリカの実践神学者クニイ・ベルガーがヨハネの黙示録を今日の教会に向けて説き明かしたものです。訳者あとがきによれば、ベルガーはステレンボッシュ大学で博士号を取得し、国のアパルトヘイト（人種隔離）政策が廃止へと向かった重要な時期には南アフリカ・オランダ改革派教会の総会議長という重要な務めを果たしたということです。

訳者の三野孝一牧師は、南アフリカに留学して著者と同じ大学で学んだ旧約学者で、二〇一九年の引退まで日本キリスト改革派東京恩寵教会の牧師を務めました。私は三野牧師の後任として赴任した者ですが、引き継ぎの話し合いの合間に南アフリカの教会の話をうかがうのを楽しみにしていました。今回、訳者の手によって南アフリカの書物が日本に紹介されたことを心から喜ぶものです。

本書の内容は以下の三部から成ります。

第一部（第一章〜第七章）では、ヨハネの黙示録という書物の内容と特色について述べられます。特に第四章から第六章は、父、子、聖霊の神についてあてられ、黙示録が三位一体の神の働きを告げる書物であることが明らかにされます。第二部（第八章〜第十四章）では、黙示録の二章から三章にかけて記されているアジア州の七つの教会への手紙の内容が説き明かされます。本書の題名「開かれている門」は、フィラデルフィアにある教会にあてた手紙の中の言葉から採られています。第三部（第一五章）では、本書の教会での用い方について、小グループで話し合ってみるなどの具体的な提言がなされています。

こうした構成からも分かるとおり、本書は黙示録全体を釈義していく注解書ではなく、重要なメッセージを抽出し

て描いていくものです。ただし、その内容が厳密な釈義に基づいていることは、黙示録研究の第一人者として日本でも知られているリチャード・ボウカムをはじめとする多くの聖書学者の研究に随所で言及されているところから分かります。

本書の特色は、現代世界への宣教という視点に貫かれている点です。著者は、黙示録が書かれた時代の教会の問題は、直接的な迫害よりも周りの文化への妥協や同化であったという近年の研究に注目します。それは、南アフリカの教会が置かれている現状であり、日本を含む世界中の教会が世俗化された社会の中で直面している問題です。著者は、そのような今日の教会に、黙示録が教える三位一体の神への独自の信仰をあらためて伝えます。そして、その際に礼

拝の意義を強調しています。確かに黙示録を読むとき、そこには難解な言葉や文章も出てきますが、何より賛美の言葉があふれていることに気づきます。本書は、教会が喜びに満ちた礼拝をささげることによって世界に福音を証しするようにと招いています。

旧約の専門家である三野牧師から黙示録についての書物を翻訳していると聞いたときは最初少し不思議に思ったのですが、訳者が教会でいつも力を込めて語っておられた宣教と礼拝の大切さが本書で繰り返し教えられているのを読んで納得しました。同じ関心を持つ多くの日本の教会の方々ととつても、本書は遠い国の書物でありながら実に身近なものとして読まれることでしょう。

（いしはら・ともひろ 日本キリスト改革派東京恩寵教会牧師）  
（四六判・二七四頁・定価三三二〇円・教文館）



新刊



### 新約聖書の 奇跡物語

上智大学  
キリスト教文化研究所  
川中 仁 編  
●四六判並製 213頁  
定価 2,200円

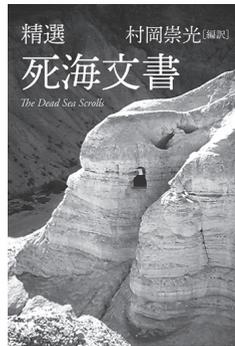
本書は、2021年の聖書週間に上智大学にて行われた聖書講座をもとに、書き下ろした論文を収録した。

- 挑発としての奇跡  
—イエスの奇跡物語伝承を  
めぐる考察—  
廣石 望
- 奇跡物語を解剖する  
—物語批評の視点から—  
前川 裕
- 神の救いのわざの  
「しるし」としての奇跡  
川中 仁  
ISBN978-4-86376-092-9

LITHON [リトン]  
〒101-0061 千代田区神田三崎町2-9-5-402  
☎03-3238-7678 FAX03-3238-7638

## 古代ヘブライ語、アラム語の 世界的権威による画期的な翻訳

〈評者〉 山我哲雄



精選 死海文書  
村岡崇光編訳



約七五年前に死海のほとりのクムランの洞窟で偶然発見された死海文書は、それまで知られていなかった紀元前後のユダヤ教の多様なあり方に光を当て、またキリスト教の成立の謎を解くうえでも鍵になるものとして、世界中の注目を集めた。それだけではない。それが世の終わりの切迫を前提とした強烈な終末論を含むものであったために、ジャーナリズム等に興味本位で取り上げられ、しかも最初の段階で復元、解読の作業に当たったスタッフにカトリックの司祭が多かったこともあり、カトリックにとって都合な事柄が多数書かれているのでバチカンの命により肝心の部分が隠匿されている、などという陰謀論まがいの言説も流布したりした。

その後、発見された文書のほとんどが公刊され、またオンラインを通じてその写真版が公開されて誰でもアクセスの意義が認められるのではなからうか」とあるが、まさにその通りで、大いに歓迎したい。

今回「精選」されたのは三点で、最初の「創世記外典」は「創世記アポクリュフォン」とも呼ばれるが、創世記の物語を敷衍したアラム語文書で、ノアの誕生（創五29）あたりからアブラハム契約の冒頭部分（創一五2）までを扱う。聖書にはない、ノアの誕生時に父のレメクが、妻がネフィリム（創六4）と不倫したのではないかと疑い、問い詰める場面や、創世記一二15に当たる部分で、エジプトの役人たちが、サライがいかに美しいかをファラオに延々と褒めそやす場面が面白い。

「ハバクク書注解」は「ペシエル」という解釈技法により、ハバククの預言を死海文書を生み出したクムラン教団の同時代の状況に結びつけて解釈したヘブライ語の文書で、例えばハバククの時代のカルデア人を意味した「カスデイム」の語が、クムラン教団の時代の「キツティム」、すなわちローマ軍を指すものとして再解釈されている。クムラン教団の指導者と思しき「正義の教師」と、エルサレムの大祭司と思われる「不正な祭司」の対決が描かれており、クムラン教団の歴史的な起源に思いを馳せさせる。

「共同体の規約」は「宗規要覽」とも呼ばれるヘブライ

ができるようになったことや、堅実な研究が数多く出版され、文書の内容が正確に知られるようになったこともあり、死海文書に向けられる目はより冷静なものになった。しかし、わが国ではこのところ、死海文書に新たな注目が集まりつつある。これまで死海文書の邦訳と言えば、聖書学研究所の一卷本（『死海文書』山本書店）しかなかったのだが、聖書写本を除きほとんどの文書を網羅した一二巻予定の『死海文書』のシリーズが、ぶねうま社から刊行されはじめたからである。昨年、教文館からコリンズのよくまとまった概説書（『死海文書』物語——どのように発見され、読まれてきたか）も出た。今回は同じ教文館から、古代ヘブライ語、アラム語研究の世界的権威である村岡崇光氏による『精選 死海文書』が出版された。「あとがき」に「基本的な文書については複数の和訳があるのもそれなり

語の文書で、訳者自身の言葉によればクムラン教団の「憲章」とも言えるものであり、教団員の心構えを説いた前文に続き、（見習い期間を含む）入団手続き、教団の組織、贖罪の儀式、二元論的世界観、日常生活に関わる規定、違反と罰則（ここが具体的で面白い）、導師の役割などについて記され、荘重な賛歌で結ばれる。

訳文は大家の手によるものだけに正確かつ達意であるだけでなく、日本語として驚くほどこなれ（すぎ？）ていて、非常に読みやすい。「枕を高くして寝られない」、「地蔵屋」（偶像職人のこと）、「愚の骨頂」、「四面楚歌」（一）、「自力本願」（!!）などといった思い切った意訳には驚かされる。評者はぶねうま社版で「ハバクク書注解」を担当し、原文の意味の取りにくさや文法上の問題で難渋したが、今回の村岡氏の訳文を見て、「その手があったか！」と目から鱗がいくつも落ちる思いであった。一言だけ不満を記させていただければ、一二〇頁の小著であるが、いささか「精選」されすぎである。クムラン教団の独特の終末論を展開した黙示文学「戦いの巻物」もぜひ収録していただきたいかった。

（やまが・てつお 北星学園大学名誉教授

四六判・一二二頁・定価三〇八〇円・教文館

# 「誰が裁かれるべきなのか」 —教会の戦争責任再考

〈評者〉豊川 慎



BC級戦犯にされた  
キリスト者  
中田善秋と宣撫工作  
小塩海平著



小塩海平氏（東京農業大学教授、日本キリスト教会東京告白教会長老）による本書は、かの戦争において宗教宣撫班員としてフィリピンに送られ、その後BC級戦犯として裁かれた中田善秋というキリスト者の前半生を、特に彼の戦争経験とその経験の内省を綴った手記などに注目して論じることにより、日本のキリスト教会の戦争責任問題の再考を読者に促す書であると言えよう。

本書は全5章から構成される。第1章「中田善秋とは誰か」において、著者は中田の出生から応召までを論じる。1941年、当時日本神学校の神学生であった中田は日本基督教団教師11名とともに陸軍軍属の宗教宣撫班員としてフィリピンに派遣された。米国によるフィリピン統治を一掃して「大東亜共栄圏」にフィリピンを組み込むという日本軍によるフィリピン占領の目的遂行に際し、大小数百を超えるフィリピンのプロテスタント教会を一つにまとめて

合同教会を作り、アメリカの宣教母体からフィリピンのプロテスタント教会を独立させ、日本軍に協力的な教会を形成するための宗教宣撫工作が必要と考えられたのであった。第2章「フィリピンでの活動」では、右記の宣撫目的に沿った宗教宣撫活動の内容や、一年あまりの宣撫工作を終えた後もフィリピンに留まった中田が「サンパブロ事件」という住民虐殺事件に巻き込まれ、BC級戦犯として裁かれるに至る経緯が論じられる。

第3章「フィリピンの戦犯裁判」では、戦犯裁判の開廷中に自身の思いを綴った手記が紹介される。たとえば、自身の無実を確信していた中田ではあるが、いかなる判決が下されようとも、神の御旨としてそれを引き受ける覚悟を綴り、イエスが十字架を一身に引き受けたように、自身もまたイエスの十字架を見据えて、「日本人の誰かがその代価を払わなければならない。私は喜んですすみます」との

思いが手記には記されている。

第4章「スガモプリズン」では、BC級戦犯として30年の刑期を言い渡された中田がその後、日本の「スガモプリズン」に移送され、スガモに収監された他のキリスト者戦犯たちとともにキリスト者のグループを作り、同人誌『信友』を発行し、後に戦犯釈放運動がスガモの堀の外で盛んになる中、堀の内で戦争罪責について思索を深めていったことが『信友』の文章とともに紹介される。『信友』はスガモプリズン内のキリスト者戦犯たちが戦争を顧み、戦争罪責の問題、講和問題や再軍備問題などについて考察を加えた貴重な資料である。「解題」を付した『信友』が昨年、不二出版社より復刻刊行されたことを付記しておきたい。

第5章「釈放後の信仰生活」では、中田の日記（未公開資料）に綴られている心情の分析を通じて、日本の教会の

戦争責任をあらためて問うている。本書は中田善秋という一信徒の戦争体験から当時の日本のキリスト教会の戦争への関わりに光を当てることにより、戦争罪責の問題を今後も教会が真摯に問い続ける必要性を示している。評者は小塩氏とともにここ数年、中田善秋について共に研究を行ってきた者であり、本書はその共同研究の成果ともいえ、本書の出版を心から喜んでる。多くの方に一読を薦めたい。特にキリスト教会の戦争責任について関心がある方には、ぜひ本書を手にとってもらいたいと思う。中田善秋研究会のメンバーであった渡辺信夫先生と山川暁氏を偲びつつ。

（とよかわ・しん 関東学院大学准教授、大学宗教主事）  
（四六判・一〇四頁・定価一〇〇〇円・いのちのことは社）

ヨベルの新刊/重版案内

**岩本遠億** 神は 神は 見捨てなかつた

これは事実の物語

一度は捨てたキリスト信仰。若い日の混迷と自己喪失、病氣、自暴自棄。しかし神は著者の人生と存在そのものに深く介入してくる。

四六判上製・256頁・1980円

**岩本遠億** AS判変型上製・344頁・1980円

366日元気が出る聖書のことば

あなたはひとりではない

中澤啓介氏 この50年間、私は、デボーションヨナルな書物を毎年変えながら家庭礼拝を守り続けてきた。……その中で、一番良かった書物は何か？ と問われれば、文句なく、「私にとっては、この書物だ」と答えた……

ヨベル YOBEL Inc. info@yobel.co.jp  
〒113-0033 東京都文京区本郷 4-1-1-5F  
TEL03(3818)4851 FAX03(3818)4858  
出版の手引き / 呈 (税込)

書店名	郵便番号	住所	電話	ファックス	URL	メール	郵便振替
北海道キリスト教書店	060-0807	札幌市北区北七条西6丁目	011-737-1721	011-747-5979	http://www.jp-shop.com	sasaki@jp-shop.com	02770-2-56520
善隣館書店	020-0025	盛岡市大沢川原3-2-37	019-654-1216	共用		zenrikan_systen_0530@ghoo.co.jp	02350-0-874
仙台キリスト教書店	980-0012	仙台青葉区1-38 穀穂センター・イワフ	022-223-2736	共用		fcwkw524@ybb.ne.jp	02230-0-31152
恵泉書房	260-0021	千葉市中央区新館2-2 千葉カリスセンタービル	043-238-1224	043-247-3072	http://www.keisen.christian.jp	keisen@vestia.ocn.ne.jp	00120-9-43619
教文館	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3561-8448	03-3563-1288	http://www.avaco.info	xbooks@kyobunkwan.co.jp	00120-2-11357
アバコ・ブックセンター	169-0051	東京都新宿区西早稲田2-3-18	03-3203-4121	03-3203-4186	http://www.avaco.info	avaco@avaco.info	00130-0-96398
待農堂	167-0053	東京都杉並区西荻南3-16-1	03-3333-5778	共用	http://taisindo-books.jimbo.com/	taisindo@jcom.home.ne.jp	00110-8-95827
バイブルハウス青山	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3567-1995	03-3567-4435	http://biblehouse.jp	biblehouse@bible.or.jp	00160-2-18410
東京キリスト教書店	162-0814	東京都港区新川1-9-1 日キ協内(外観専門)	03-3280-5663	03-3280-5637		tokyo@nikkikan.co.jp	00130-3-60976
横浜キリスト教書店	231-0063	横浜市中区花咲町3-96	045-241-3820	045-241-5881	http://www.biglobe.ne.jp/~yokohamacs/mbs.html	sksch@mvva.biglobe.ne.jp	00250-4-2512
清光書店	951-8114	新潟市営所通一番町313	025-229-0656	共用			00560-8-51419
静岡聖文舎	420-0866	静岡市葵区西草深町20-26	054-260-6644	054-260-5612	http://www.s-seibun.co.jp/	info@s-seibun.co.jp	00810-8-26558
名古屋聖文舎	464-0850	名古屋市中区今池5-28-4	052-741-2416	052-733-2648	http://nagoya-seibunsha.la.cocacn.jp/	nagoya-seibunsha@nifty.com	00810-5-14073
京都ヨルダン社	602-0854	京都市上京区荒神口通河原町東入ル	075-211-6675	075-211-2834	http://web.kyoto-net.or.jp/people/kjordan/	kjordan@mtbx.kyoto-net.or.jp	01010-2-594
大阪キリスト教書店	530-0013	大阪市北区茶屋町2-30	06-6377-6026	06-6377-6027	http://osekacbs.web.fc2.com/	ochbook@river.ocn.ne.jp	00990-3-43009
バイブルハウスびぶるすの森	591-8041	堺市北区東雲東町1-1-16	072-257-0909	072-253-6132		sakai-jps@bible.or.jp	00160-2-18410
神戸キリスト教書店	650-0021	神戸市中央区三宮町3-9-18 三層ビル2F	078-331-7569	078-945-9388		kobex@nikkikan.co.jp	00170-2-421390
広島聖文舎	730-0841	広島市中区舟入町12-7	082-208-0022	082-208-0177		hseibun0951@yahoo.co.jp	01360-4-1958
リバーサイドブックス	779-1105	徳島県阿南市羽ノ浦町古庄大道ノ面13	090-8694-4986	050-3142-3017		ykwbt3@gmail.com	16220-17974891
松山キリスト教書店	790-0804	松山市中一万町1-23	089-921-5519	089-921-5413	http://www.geocities.jp/nagayara_107/index.html	sksch@ddokidoki.ne.jp	01650-1-2120
北九州キリスト教ブックセンター	802-0022	北九州小倉北区上富野5-2-18	093-967-0321	共用		kcbookcenter@bible.or.jp	01780-4-39965
新生館	810-0073	福岡市中央区舞鶴2-7-7	092-712-6123	092-781-5484	http://www.sinseikan.jp/	info@sinseikan.jp	01750-5-10932
キリスト教書店ハレルヤ	862-0971	熊本市大江4-20-23	096-372-3503	共用		k-haleruya@bible.or.jp	00160-2-18410
沖縄キリスト教書店	904-2143	沖縄県沖縄市知花4丁目12-33	098-927-0220	098-938-1102	https://www.okinawacbs.net	info@okinawacbs.net	01790-4-152916

※ 一般書店関係の方は 日キ販営業部 TEL 03-3260-5670 にご連絡ください。

「時を経ても古びないもの、時を超えて新しいもの」をクリ  
スチャンの精神科医がさまざまな側面から提言。老いのあ  
りようを掘り下げつつ、健やかな日々を過ごすコツを伝授。  
四六判・216頁・定価2420円

石丸昌彦著

## 老いと祝福

A5判・506頁(予定)・予価7700円

片柳弘史著

「あなた」と「あなたがた」という人称変化はわたしたちに  
何を告げるのか。編集者の意図に迫りつつ申命記を解釈す  
る一冊。

## INFORMATION

### 近刊情報

## 日々を生きる力

——あなたを励ます聖書の言葉366

## ■教文館

A5判・150頁・予価1650円

2022年2月、「災害とキリスト教」をテーマに開催され  
たセミナーを単行本化。同大教授の声名定道氏をはじめと  
する神学者や、被災地支援や子ども食堂など、現場で地域  
のために奮闘してきた牧師たちの講演を収録。

関西学院大学神学部編

## ■キリスト新聞社

## 災害とキリスト教

## 共観福音書(下)

森川甫、吉田隆記

マタイ・マルコ・ルカの三福音書を対観しながら記された  
註解書。福音書の「調和」を見出そうとする改革者の視点。  
上巻の刊行から38年ぶりの邦訳完結となる。  
A5判・468頁・予価6000円

## カルヴァン・新約聖書註解II

## ■新教出版社

## ■日本キリスト教団出版局

## V T J 旧約聖書注解 申命記

鈴木佳秀著

# 福音と世界

2022年11月号

## 特集

ヘイト／反ヘイト 何が「われわれ」をつくるのか

寄稿者 中村一成、斎藤小百合、李明生

大久保正禎、藤江以子

書評 平良愛香監修『LGBTとキリスト教』(工藤万里江)／好評連載 フット・スピリチュア

ルズ(山下壮起)、サンタース&ヤーバー「教会におけるマイクロアグレッション」(訳・解説 眞下弥生)、「日本のキリスト教」を読む(山口陽一)、ルカ福音書(山崎ランサム和彦) ほか

A5判・定価660円・〒70円

定期購読についてはお気軽にご相談下さい。

新教出版社 TEL: 03-3260-6148

Email: sales@shinkyō-pb.com

## 編集室から



不安を覚えつつも取り敢えず急ぎ取り掛かる。

同じ頃、すでに物価高騰を予想するニュースが流れていたが馬耳東風で、取引業者から「早く進めた方がいいですよ」と言われるまで自身の仕事とは結びつかなかった。

その後、段取り調整の甲斐あってなんとかカタログ用の見本制作にまでたどり着けた。納品はクリスマスまで余裕があるのでホッと一安心していると業者から、「原材料がまた値上がります。今月中に仕上げることをお勧めしま

二〇二二年が明けて間もない頃、

毎年、キリスト教出版販売協会で作るクリスマスカタログ制作が、一か月前倒しになると聞かされた。新商品の掲載は例年でもギリギリのスケジュールなのに間に合うのだろうか。

## 予告

### 本のひろば

2022年12月号

## 本・批評と紹介

(巻頭エッセイ)「皆川達夫著『洋楽渡来考』とその後」樋口隆一、(書評)潮 義男著『創世記講解下』創世記23章〜50章、土井健司著『教父学入門』、スヴェトラナ山崎ひとみ著『微笑みは永遠に』、C・G・シユウエンツェル著『ヘロデ大王』他

す」との連絡が入った。

何事も天の采配なのか、カタログの前倒し制作に感謝する一方で、今度は商品の価格設定に青ざめる。

仕事をするようになって、価格の決断がとて繊細であることを知った。最初の頃はとにかく安く、しかし、安かろう悪かろうではダメだと教えられた。一円差をせめぎあっても無理をし過ぎず、お釣りに計算にも配慮できると良い。

以前、ミリオンセラーを記録したミュージシャンがコメントで「100万人の人が自身の音楽に千円を出してもいいと思ってくれた。それがうれしい。」と言っていたことを思い出した。販売総数に捉われ見過ごしがちな視点に、苦難を乗り越える力があるような気がした。

(吉崎)

# 反ナチ抵抗運動とモルトケ伯

雨宮栄一著

クライザウ・サークルの軌跡

10月14日

クライザウ・サークルとは、ナチに反対し、ドイツ敗戦後の再建構想を練った、ユンカーをはじめ聖職者や学者、労働運動家など様々な人が参加したグループである。彼らの大半は逮捕され死刑に処された。本書は、この知られざる抵抗運動の中心人物であった法律家モルトケの人物像とキリスト教信仰を明らかにする。著者の遺作となった。◆四六判・定価3850円



# 呻きから始まる

祈りと行動に関する  
24の手紙

9月22日

栗田隆子著

『ぼそぼそ声のフェミニズム』に続く第二弾!

「私にとってフェミニズムと信仰はどちらも必要なものです」と語る著者が、一人のカトリック信徒として、キリスト教、そしてフェミニズムと出会う自らの歩みを、聖書の言葉に導かれながら綴る。『福音と世界』好評連載の単行本化。◆四六判・定価2200円



# 教父学入門

ニカイア以前の教父たち

9月15日

土井健司著

キリスト教の基礎が築かれた百花繚乱の世界へ

現代のキリスト教の考え方に決定的な影響を及ぼした使徒教父、弁証家、アレクサンドリアのクレメンスやオリゲネス、テルトゥリアヌスにキプリアヌス等、また古代文獻に表れた女性たちも視野に収めながら、教父たちの世界へといざなう。◆四六判・定価2420円



# 初期キリスト教の世界

好評!

松本宣郎著

彼らが感じ、考え、生きた真実に、歴史学から迫る

古代地中海世界に生きたキリスト者たちの心性、職業労働観、教会の営みなどをめぐり、多岐にわたる論点が浮かび上がる興味尽きない11の論考と講演を収録。ローマ史研究に新たな心性史の地平を切り拓いた著者の真骨頂。◆四六判・定価3300円



# たどりつくまで

ロバと三人の旅

[文] アン・ブース [絵] サム・アッシャー [訳] 真下弥生

危険な権力者に追われ、安住の地を求めて旅するロバと親子三人。聖家族の《エジプト逃避》を現代の難民に重ね合わせ、不安に満ちた、しかし人の温もりに支えられた旅路を描くユニークなクリスマス絵本。◆A5変型判・定価1650円



注目の新刊

日本キリスト教団出版局 〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18 TEL.03-3204-0422 FAX.03-3204-0457  
e-mail eigyou@bp.uccj.or.jp ホームページ https://bp-uccj.jp (価格10%税込)

# 三浦綾子生誕100年記念出版 あらすじで読む 三浦綾子 名著36選



森下辰衛 監修

2022年10月25日刊行予定

森下辰衛／上出恵子／奥野政元 著

『氷点』『塩狩峠』『海嶺』『銃口』など、今でも多くの読者を惹きつける三浦綾子の作品。その中から36作品を厳選し、三浦文学の専門家3名が「背景と解説」「あらすじ」を紹介する。人間の生き方を考えさせ、時代を超えて読み継がれる三浦文学の魅力が詰まった一冊。『信徒の友』連載の単行本化。

◆四六判 並製・160頁・定価1,760円



生誕100年記念 出版物 好評発売中  
『愛は忍ぶ 三浦綾子物語 挫折が拓いた人生』 三浦綾子記念文学館 監修 日本キリスト教団出版局 編 定価1,320円  
『三浦綾子 祈りのことば』 おちあいまちこ 写真 定価1,320円



# 老いと祝福 石丸昌彦 著

2022年10月25日刊行予定

祝福とは何か。クリスチャンの精神科医がその意味を聖書からひもときつつ、老いの恵みを考える。超高齢社会を直視し死生観にも踏み込みながら、健やかな日々を過ごすコツを伝授。「時を経ても古びないもの、時を超えて新しいもの」をさまざまな側面から提言する。  
◆四六判 並製・216頁・定価2,420円

本のひろば.com

